

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370373

研究課題名(和文)ポストドラマ演劇における上演と戯曲の相互照応関係の研究

研究課題名(英文)Interaction of performance and drama in the postdramatic theater

研究代表者

高橋 慎也 (Takahashi, Shinya)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：60171493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：演劇データベース分析の結果、戦後ドイツ演劇がドラマ演劇中心の時代、ポストドラマ演劇中心の時代、2000年代以降の新ドラマ演劇の時代と3段階に分けることができることが実証的に明示できた。この間に演劇テキストと舞台上演はテキスト性重視、パフォーマンス性重視、テキスト性とパフォーマンス性の相乗作用の重視へと変遷した。ミュンヘン大学演劇研究所との共同作業によって、2000年代以降、ドイツ演劇において「物語」への回帰が進行したことが明らかになった。また日本演劇とヨーロッパ演劇を比較研究する際に、上演における「沈黙のパフォーマンス性」や「依り代としての身体」という観点が有効であることも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of theater databases (Berliner Theatertreffen, Theaterprizes in "Theater heute"), it is clearly proved that the theater history in post-war Germany can be divided into three ages, text-oriented age (dramatic theater) until 1960's, performance-oriented age (postdramatic theater) until 1990's, text- & performance-oriented age (new dramatic theater) since 2000. By co-research with the Theater Institute of the University of Munich, it became clear that since 2000 the German theater has been returning to the so-called "story"-oriented one, which must be combined with the established postdramatic theater. Otherwise it became also clear that on comparing German and Japanese theater such viewpoints as "performativity of silence" and "body as Yorishiro(憑代)" are useful in comparative theater studies.

研究分野：ドイツ演劇 比較演劇

キーワード：ドイツ演劇 ポストドラマ演劇 日独比較演劇

1. 研究開始当初の背景

ドイツでは1970年代の演劇の「パフォーマンス的転換(performative Wende)」を経て、1990年代以降にポストドラマ演劇が台頭・定着し、それを背景とした新たな演劇学理論として「パフォーマンス性」(ライブ・パフォーマンスにおける演者と観客の相互影響関係性)を基本概念とする上演分析理論が大きく発展した。しかし「パフォーマンス性」の演劇理論は、戯曲が読者に対して持ち得る「テキストのパフォーマンス性」への分析が不十分である。また上演と戯曲の「テキスト性」(記号による意味生産性)と「パフォーマンス性」の相互照応関係の分析理論についても戯曲の舞台化(staging)に関するものに留まり、上演と戯曲の「物語構造」、「テキスト性」、「パフォーマンス性」を相互に比較対照できるような理論は確立されていない。こうした現状分析を踏まえて本研究は、1970年以降の日独ポストドラマ演劇の代表的な上演と戯曲のデータベース構築、テーマと形式によるそれらの分類、演劇交流史の年表作成を基礎とし、「パフォーマンス性」概念と「テキスト性」概念の批判的検証を経て、上演と戯曲の相互照応関係を分析するための新たな理論形成、分析結果を提示する教材作成とその教授法の確立を目指した。

さらに岡田利規や三浦大輔といった現代日本の演出家・劇作家の上演に対するドイツでの評価の高まりと、ドイツ人研究者の現代日本演劇に対する関心の高まりを受け、日独の共同研究の必要性、両国のポストドラマ演劇における上演と戯曲の相互照応関係を統合的に分析できる理論形成の必要性も感じるに至った。こうした研究経過を経て、先行する演劇・戯曲理論の長所・欠点および今後の研究領域が明らかとなり、本研究の着想に至った。

申請者はまた、これまで参加した国内・国外の学会での発表や授業を通して、動画処理、翻訳処理、理論紹介を伴う上演分析を短時間に効率的にプレゼンテーションすることが難しいことを痛感してきた。この問題を改善するために本研究では、舞台映像、ドイツ語原文、日本語翻訳、上演と戯曲の分析理論、分析結果を効率的に学生に提示するパワーポイントによる教材、およびそれをういた効率的な教授法を開発することも目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目的はドイツ語圏のポストドラマ演劇(Postdramatisches Theater)における上演(Aufführung)と戯曲(Drama)のデータベース構築と年表作成を行い、上演と戯曲との相互照応関係を「テキスト性」、「パフォーマンス性」、「物語構造」、「沈黙のパフォーマンス性」の4点から分析する理論形成を行うことにある。日独研究交流の面では、ドイツの演劇学研究所と日本学研究所の代表的な演劇・戯曲研究者との共同研究を継続し、

上演研究と戯曲研究における新しいタイプの日独共同研究ネットワークの形成と拡充を図る。教育分野では舞台映像、戯曲のドイツ語原文、日本語翻訳、上演と戯曲の分析理論、分析結果を効率的に学生に提示する教材と教授法を開発を行うこととした。

3. 研究の方法

1970年代以降の日独のポストドラマ演劇における代表的な上演と戯曲をデータベース化して分類し、同時代の傾向と年代の変遷を明らかにした。上演については「物語構造」と上演スタイルごとの、戯曲については「物語構造」とテーマごとの分類を進めた。同時に演劇記号学やパフォーマンス性の美学といった、上演理論と戯曲理論の先行理論の検証と整理を行う。次に上演と戯曲の相互照応関係を統合的に分析できる理論形成を試みた。また劇場付属のアーカイブ調査など、同時代の日独の上演と戯曲に関する現地調査を実施した。さらにドイツの日本学研究所と演劇学研究所と共同研究によって、ドイツ人研究者との理論上の意見交換を行い、本研究の目指す新たな理論形成を図った。また高度なドイツ語能力、専門知識を持つ大学院生の研究補助により、上演分析提示のための教材・教授法を開発を行った。

4. 研究成果

本研究の成果を項目別に記載する。

4-1. 上演・戯曲データベースの作成と分類

ドイツの演劇雑誌『Theater heute』に毎年掲載される「昨シーズンのベスト演劇」、ドイツ最大の演劇祭であるベルリン演劇祭への招待作品、ドイツ戯曲の最高賞である「ミュールハイム戯曲賞」という3種類の上演・戯曲データを基にし、1970年から現在に至る代表的な上演と戯曲のデータベースを作成した。併せてドイツ舞台芸術協会刊行の『Theaterstatistik “と” Wer spielte was? “のデータ分析によって、1990年以降20年間のドイツ演劇の上演の動向について本論では以下のような点が改めて確認できた。

1) 1970・80年代には68年世代の作家が描く、68年世代の社会状況や心理を描く戯曲が高得点を得ていること

2) 1970・80年代には68年世代の演出家による、演出家の斬新なスタイルを打ち出すドラマ演劇系の「演出家演劇」の上演が高得点を得ていること

3) 1990・2000年代には68年世代のイエリネクの戯曲が高得点を得ている一方で、さらに若い世代の劇作家の作品が多く高得点を得ていること

4) 1990・2000年代にはポストドラマ演劇の舞台上演を得意とする演出家の上演が高得点を得ていること

5) 1990年代はドラマ演劇主流の時代からポストドラマ演劇主流の時代へとドイツ演劇が大きく変化する転換期であったこと

以上のような分析結果を踏まえて、ドイツの演劇システムが日本のモデルになり得るか、という点を検討してみると、次のような推論が成り立つ。すなわち、ドラマ演劇からポストドラマ演劇への転換もまた、ドイツの補助金演劇制度がもたらした結果であるから、ポストドラマ演劇が日本の上演スタイルのモデルとなるには限界がある

本研究における上演データの分析は、主に1990年から2010年までの上演統計を基にして行ったが、その結果1990年代以降にポストドラマ演劇に分類される上演が多くなったことがデータとして明らかになった。ただ複数の申請者の研究協力者であるミュンヘン大学のバイヤーデルファー教授、エンゲルハルト講師らによって指摘された傾向、すなわち2000年代以降にドラマ演劇が復活しているという傾向は、上演統計のデータとしては明示されなかった。

4-2. ドイツ人研究者と研究協力とその成果

ドイツ人研究者としてはミュンヘン大学演劇学研究所のバイヤーデルファー教授、バーム教授、カウム講師、エンゲルハルト講師、ライプツヒ大学演劇研究所のヘーグ教授らと研究交流を行った。その結果、2000年以降にドイツ語圏ではポストドラマ演劇からドラマ演劇への回帰、観客の重要性の高まりを背景とする芸術演劇から大衆編劇への転換、社会問題の深化を背景とするドキュメンタリー演劇の新たな台頭など、舞台芸術の多様化が大きく進展していることが明らかとなった。

4-3. 舞台上演分析の理論形成

演劇学における記号論的分析理論と「パフォーマンス性の美学」を検証した結果、その日本の戯曲作家、演出家、俳優、ダンサーによる舞台上演を分析する際には、日本の舞台芸術に特有な理論による補完が必要であることが明らかになった。すなわち日本の舞台芸術を分析する際の重要なキーワードとしてある「霊」や「気」に対応する学術用語と体系的理論が欧米のパフォーマンス論・演劇論には不足しているのである。岡田利樹の上演や暗黒舞踏の分析には五来重が提唱した「霊の宥和」、「鎮魂」、「霊の送り出し」といった芸能分析の理論が有効であることが本研究によって確認することができた。特に「沈黙のパフォーマンス性」の分析には「霊との対話としての上演」という視点が有効であるので、今後は本研究の成果として学会に発信する予定である。たとえば「パフォーマンス性の美学」の主要概念である「オートポイエーシス的なフィードバック・ループ」という概念は「演者と観客の気の循環」という用語で補完できる。また「パフォーマンス性の美学」では、身体を「記号としての身体」と「現象としての肉体」に分類するが、これに「依り代としての身体」という身体観を補完する必要がある。なぜならば日本の舞台芸

術の機能は現代においても、民俗芸能や古典芸能が有する「霊との対話」という機能を持ち、そのための媒体として「依り代としての身体」を必要としているからである。また「依り代」の範囲は暗黒舞踏やコンテンポラリー・ダンスでは仮面、隈取に限らず、顔のメイクアップ、衣服、さらには演者の皮膚にも広げて考えることができる。舞台上演における「沈黙」の機能のひとつとしても、「霊との対話」を挙げるができる。日本の民俗芸能や古典演劇、さらに暗黒舞踏やコンテンポラリー・ダンスにおいて、「霊との対話」は沈黙の中での身振りの停止、また「反閃」の現代的表現と捉え得る変則的な身体のリズムや痙攣的動きの後に現れる「霊との統合」の状態を表現していると思えることが可能である。こうした舞台上演分析の視点は日本では柳田國男、折口信夫らの理論を踏まえて、宗教民俗学者の五来重や鎌田東二が提唱し、国内の学会では一定の支持を得ている。また「言語のパフォーマンス性」は、日本の「言霊」観と共通する側面を持っている。このように「パフォーマンスの美学」や「ポストドラマ演劇」の理論は、日本の民俗宗教学の理論と統合することによって、より精緻な上演分析理論となることが本研究では明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

高橋慎也、現代ドイツにおける『ハムレット』受容とポストドラマ演劇：『ハムレット』上演データ分析による受容動向、紀要 言語・文学・文化(中央大学文学部)、査読なし、116号、2015、99-121

高橋慎也、近年のドイツ演劇上演データ分析：ドラマ演劇からポストドラマ演劇への転換、ドイツ文化、査読なし、2015、70号 135-161

[学会発表](計 3 件)

Dancing with Spirits in Animated Climates in Japanese Performing Arts、国際パフォーマンス学会、2016年7月6日、メルボルン大学(メルボルン)

Dialog with the Dead in Toshiki Okada's Performing Works、岡田利樹シンポジウム、2016年8月6日、トリア大学(トリア)

Dialog mit den Toten in den Dramen Heiner Müllers und Hisashi Unoues、アジアゲルマニスト会議、2016年8月27日、Chung-Ang Universität(ソウル)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋慎也 (Takahashi Shinya)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：60171493

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：